めだかボックス 全てを斬り刻む者

ジークフリート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックス 全てを斬り刻む者

【Nコード】

N8833U

【作者名】

ジークフリート

【あらすじ】

これは、カミキリ神刃と恐れられた少年の話。

第一箱 「刀槍劍戟」 (前書き)

やってしまった…後悔はないけど！

第一箱 「刀槍劍戟」

とある病院にて。

診察室の隣の部屋。

ここに数人の子供達が椅子に座って待っていた。

眼鏡をかけてゲームをしている男の子、金髪でぼーっと天井を見つめる女の子。

そして、頬に十字に傷の付いた黒髪の少年が居た。

十字傷の少年はイヤホンを付け曲を聞きながら目を閉じていた。

「おい、イヤホンから音漏れしてうるせえんだよ。」

金髪の少女は十字傷の少年に話しかける。

だがイヤホンを付けているため当然聞いているわけもなく。

少女は何も聞いていないのに対し、怒りを見せ。

どこから出したのか釘バットで少年の頭を叩いた。

鈍い音が響き、少年は倒れた。

「話聞かない奴が悪いんだぜ。」

少女は笑いながら倒れた少年に向かいはなした。

少年はユラリと立ち上がり少女に向かい言う。

「そいつはすまなかつたな、音量を下げれば良いんだろっ?」
何事もなかったように、立ち上がった。
頭からも血は付いてなく、無傷であった。

(あれ?なんで怪我してねえんだ?手加減してねえのに。)
不思議に思ってる少女に少年は聞く。

「お前、名前は?」

突然の事に呆気にとられたがすぐに名乗り返した。

「志布志飛沫…」

「そうか、良い名前だな。そこでゲームやってる君は?」

今度はゲームの少年に聞く、少年は驚きつつ返事をする。

「蝶ヶ崎蛾ヶ丸です、貴方の名前は?」

「俺か?おれは…」

「朝原宮斗あさはらみやとくん、次どうぞー。」

名乗ろうとしたときに来たナース

それに少し舌打ちし、すぐに行くと言えた。

「まあ聞いての通り、朝原宮斗だ、じゃあ二人とも、縁があればまた…」

とそそくさと診察室の扉の前に行き、振り返る。

「蛾ヶ丸、ゲームの音うるさいから、イヤホンやるよ。」
と投げ飛ばし、診察室に入る。

サイド 宮斗

ふう、頭痛かったー。

突然殴るとか、理由もシヨボかったし、しかも釘バットだぜ？
何処から取り出したんだよ、チクシヨウ。

「こんにちは、宮斗くん。」

目の前に白衣を着た女の子…じゃなく、先生がいた。
この人、見た目に反して子持ちだからな。

「ちわーす、人吉先生。」

こちらも適当に挨拶して、椅子に座る。

「んーと…前に検査した結果を言いますが、貴方は間違いなく異常
よ。」

「あっそですか。」

余り興味もなかったし、適当に返事をする。

「…驚かないのね。」

「驚いて何になるんですか？そんな事より先生が結婚して子供も居
るって事が驚きっす。」

「そんな事って…て言うか、その話今は関係ないよ。」

「ですよー、ですがこれだけはハッキリしたい。」

俺は真面目な表情をして、彼女に問う。

「貴方の夫は、ロリコンですか？」

「セイツー!!」「グフウー!!」

いって…ボディブローモロに食らった、ゴホッ。

「君が悪いんだからね？」

だって事実じゃん、見た目子供…スイマセン、拳を下ろしてくださいお願いします！

「まったく…で、そろそろ抑えてくれない？」

「え？」

周りを見渡すと、俺の周囲にエネルギーで作られた剣みたいなのが浮いていた。

やっべ、無意識で出しちゃった。

消えろ、と念じると剣達はピシッと音が鳴り、崩れていった。

「君ね、無意識のうちに出すのやめなよ？誤って人を斬っちゃおう？」

「そこらへんは平気です、ちゃんと抑えられるようになってきましたから。」

「そっ？なら良いけど…」

そう、俺の異常は『何も無い場所から光の剣が出てくる』らしい。

まあ残念なことに、この能力に名前は無い。

いや、付けれるけど、良い名前が思いつかない。

「ん？どうしたの。」

こちらの異変に気づいたのか、人吉先生が顔をのぞき込む。

この人結構綺麗だよな。

「いや、俺の異常って名前無いじゃないっすか？付けるとしたらどんな名前にしようかなって。」

そう言うと人吉先生は少し考えてから、ペンを取り、紙に何か書いていた。

そして、ペンを置き、紙を俺に見せてきた。

そこに書いてあったのは、『刀槍剣戟』と書いてあった。

「ブレイズソード 刀槍剣戟ってのはどう？」

と自慢げに見てくる、その顔は「どうよ？」とでも言いた下だ。

まあ良い名前だ。

「良いじゃないですか、その名前…痛い名前だけど。」

「まあ良いじゃない、世界にはもっと痛い名前があるのよ…さて、診察終わり！ほら、もういいよ。」

とにこやかに、俺の背を押して診察室から出した。

ふむ、有意義な時間だった。

さて、帰りますか！

あれ？蛾ヶ丸君からイヤホン返してもらってない…
まあいいや！

とある会話

「志布志さん、このイヤホンどうしましよっ？」

「さあ…とりあえず、会うまで使ってねばっ？」

第一箱 「刀槍劍戟」 (後書き)

ありがとうございました

第二箱 「神刃(カミギリ)」 (前書き)

ダメだこりゃ。

第二箱 「神刃（カミギリ）」

中学生の話

サイド 朝原宮斗

時が流れるのは早いものだ。

人吉先生のボディブローが懐かしく思える。二度と食らいたくはないが。

今は始業式、校長の大事なお話を聞き流しつつ、周りの人たちの顔を見る。

ふむ…平凡な奴も居れば個性的な奴もいる。

そして、俺は見つけた。

クソやばい空気を垂れ流している男を。

髪型は黒の短め、見た目は普通の奴だ。

だがなんつーか…普通でも異常でもない…なんだあれ？

そして、気づいた。

ソイツが、俺を見ていたことを。

その男はこっちを見てニタア、と笑い、また校長の顔を見た。

………まずいねこれ。厄介事が俺に来るよ？

始業式が終わり、生徒達は教室に戻った。

俺はそのまま、嫌悪感が拭いきれないままだ。

他の奴から見たらあれだ、くーい雰囲気を出してるような。

俺は教室に行かず、トイレに駆け込む。

そして携帯である人に電話をかける。

画面には

『不知火 袖』

と書かれていた。

「……つー訳だよ。」

『なるほど……』

始業式にあつたことを、そのまま話す。

この人は俺の保護者だ、書類上のな。

『だとすると、気をつけた方が良くもいけませんね。』

「なんでか、聞いてみても？」

俺は便器の水を流し、手を洗う。

『少なくともその人は、君に興味を持つてるはず。』

「そんなまさか……!？」

一瞬だった。顔を上げ、瞬きした瞬間だった。

目の前にある鏡が、俺を移していた……注目するのはそこじゃない。

その後ろで、俺の後ろに笑顔で奴が立っていた。

思考が止まる、呼吸が乱れる、意識がもうろうとする。

心臓の鼓動が速まる。

奴は……何者だ？

『……………ぶ……か！？』

携帯から声が聞こえ、呼吸を整えて返事をする。

「大丈夫だ…問題ない。」

『何があつたのですか？』

「いや、本当に何でもないんだ…旦那、俺ホントにヤバい奴に目を付けられちまつたみたいだ。」

『…十分気を付けて下さい。』

おう、と返事をし切る。

…ヤベーなこりゃ。

それから少し時間が経った

奴は球磨川と言う男らしい。

知り合いに聞いてみた。

あれ以来俺は奴と会っていない。

まあ良いことである。そしてもう一つ良いこと。

女子の友達出来ましたア！！ パチパチパチー

やっただぜチクシヨー！

小学生の頃は誰も俺と話してくれなかったな！

理由が「頬の傷怖い」だと。

好きでこんなもん付いた訳じゃねえし。

え？女子の名前？えーと…安心院なじみだぜ。

彼女とはよく話す、校長のヅラ疑惑やらでな。

球磨川の事も安心院に聞いた、本当にヤバい奴らしい。彼女曰く「彼には余り関わらない方がいい」とき。まあそれは言われなくても分かるからな。このまま二度と会いたくない、絶対にな！

また少し時間が経った。

突然だが目の前に球磨川が居る。

イスに座りながら満足気に、足元にある何かを見ている。

そしてその手は、赤く濡れていた。

その足元にあるナニカは、人だった。

女子制服を着た、髪の毛長い女子。

球磨川は俺の気配に気づいたのか、こちらに顔を向けてくる。

その顔は、不気味なくらい、笑顔だった

『やあ、朝原君！どうしたんだい？顔色悪いよ？』

ご機嫌な球磨川は、イスから立ち上がり、こちらを見続ける。

『いえ…球磨川先輩、その人は…』

『ああー、この人はね。安心院なじみって言う人なんだよ！。』

知ってる？と首を傾げて尚笑う球磨川に、思考が追いつかなかった。

アレが…安心院？

顔のある場所は血塗れで、誰かも分からないソレが、安心院だと…

………？

「一体何のために…こんな事を…」

問いつめたくなった、すぐに奴の元へ行き、顔面を殴りたかった。だが…これだけは、先に、聞きたかった。

『それはね、僕の気持ちを確かめた……』

聞こえなかった、全く、少しも。

ただ俺は、安心院らしきものを見つめていた。

あれ……おかしいな……

余り悲しんでない自分が居る……

親しかつたはずなのに……一緒に笑っていたはずなのに……

なにも、感じない……

だが、これだけは分かる。

自分も……球磨川と同じ、笑っていた（……）からだ。

どうしてだか分からない、ただ、どうしてもこの惨劇が面白くて、同時に、球磨川に怒りを覚えた。

『……っていうこと……なに笑っているの……ッ!?!』

気が付くと周りにまた刃が浮いていた。

まあいい、今はこのイライラを、奴にぶつける。

「……」
ブレイズソード
刀槍剣戟 「……」

そこからは迅速に終わった。

宙に浮かぶ刃達を奴に五、六本投げ飛ばした。

奴は避けずに体中に突き刺さり、倒れた。

意外にもあつけないな……

俺はそのまま、教室を出た……安心院には目も向けずに。

資料 朝原宮斗（前書き）

設定です。

資料 朝原宮斗

名前 あさはらみやと 朝原宮斗

性別 男

好きなもの 刀・良い奴・トマト・生徒会・不知火 袖

嫌いなもの(天敵) 球磨川・レモン・梅干し・黒神兄・都城王土・

雲仙冥利

特色 赤

属性 死

称号 カミキリ 神刃 無情の剣 神殺し宣言した馬鹿

イメージC V 森田成一

アブノーマル
異常

名前 ブレイズソード 刀槍剣戟

名付け親、人吉瞳

この能力は、虚空から光っている剣を出す。

その剣を飛ばすことも出来るし自身で握り、振り回すことも出来る。
今の所斬れない物は何もないらしい。

槍、刀、剣を作るが、盾も作れないかと考え中

イメージはPSYRENのジュナスが使う、毘娑門シリーズの一つ
他の毘娑門シリーズを使用するかもしれない。

過負荷 ????

後々公開

詳細

子供の頃異常だと知った両親に捨てられ、原作では理事長だった不知火袖に引き取られる。

書類上、親子となってるが二人はどうでもいいと思っている。因みに不知火袖の愛称は「ダンナ」「アンタ」

孫の半袖と食事する度、諭吉三枚もってかれる。

宮斗曰く「奴の胃袋は化け物か!？」

子供の頃は病院で人吉瞳と話すのが好きだった。

宮斗曰く「母みたいだ」とのこと。

球磨川を毛嫌いする。

後に追加するだろう。

第三箱 「生徒会に入らないか？」 (前書き)

やっちまった感が半端ない！

第三箱 「生徒会に入らないか？」

「世界は平凡か？」

…分らない。

「未来は退屈か？」

これも分らない。

「現実 is 適当か？」

分かりません！

「安心しろ、それでも生きるとは劇的だ。」

それは同意です。

箱庭学園、俺の保護者、不知火袖が理事長をやってる。

俺は…決して袖のダンナのコネで来た訳じゃない。…ホントダヨ？
いや、まああれだ…推薦できた、俺そこそこ頭良いからな！

んで、高校一年になるまで凄く苦労したぜ…いや、あんまり苦労してないが。

あれ以来球磨川とあってない、てか、あの子の事…俺が居なくなつてから黒神めだか…先ほど演説してた奴だが、あいつが来たらしい。それで怒って球磨川をボコつたらしい。

それで、問題が一つ。

最近噂で「空から剣の山を降らせてくる男が居る」とか「その男は、悪さした奴を切り刻む神の刃」とか。

噂があるらしい、多分俺のことだろう。

神刃カミキリとか妙な名前もついて…

俺はそんな事やった記憶はありません！多分球磨川がでっち上げた噂かもしれないが。

あの野郎は何時か叩つ斬る！

そんな決意表明をしてる間に、始業式は終わった。

^{ノーマル}
一年一組についた。

ダンナに頼んでここに入れてもらった。

アツチ行ったら変人が多そうだからさ。

自分の席に座り、だらける。

ふう…このクラスならやって行けそうだな。

「あひゃひゃ 宮斗じゃん、なんでここに居んの？」

幸せは来なかったらしい。

目の前には小さいガキンチョ…明らかに高校生はなく、見た目小学生のガキ。

不知火 半袖 が俺の前に立っていた。

「いや、俺このクラスだから。」

「ふーん。そうだ！今日一緒になんか食いにいこ！」
とニッコリと笑顔で言う。…ちよつとまて。

「お前と行ったら俺の諭吉さんが消えるんだよ。」
「ダイジョブダイジョブ」

はあ…ちくしょう…まあ良いか！

今月の小遣いが消える…袖のダンナに頼むかな？

と何か考えてたら一人、近づいてくる影が。

「不知火ー、つて、今取り込み中か。」

「いや全然だよ。」

と何かちよつとガラの悪そうな学生が話しかけてきた。
つか不知火の知り合いか。

「君、名前は？」

「え？人吉善吉だけど。」

「人吉…？俺は朝原宮斗だ、よろしくな。」

まさか人吉先生の息子さん…か？

「ああ、よろしく！」

なんにせよ、友達ゲット…なんてな。
とりあえず聞きたいことがある。

「善吉っ、朝原宮斗くん、理事長室に大至急来て下さい。」…はあ。

携帯で連絡すりゃあ良いじゃん。あの人は。

「俺がなんだつて？」

「いや何でもない、また今度聞くとよ。」

俺は教室を離れ、早歩きで爺さんの元へ向かう。

道中生徒会長とすれ違い、挨拶してみたら返してくれた。
なるほど、生徒会長と言うだけのことは有る。

…善吉の叫び声が聞こえたが無視した。

「なんですか、袖のダンナ。」

茶を啜りながら、目の前にいるじいさんにと話す

どうせ、あの話…だがな。

「君も分かる通り、あの計画に参加して欲しいのです。」

やはりだ、俺が何故一組に入ったのか分かっていない。

俺はただ、普通の学園生活を送りたいだけだ。

「分かっていきますよ、だから…」

と理事長は机からサイコロを取り出した。

「これを振って下さい。」

机に転がったサイコロを見つめる。

…確か、占いだっとな。

気が引けるが…振るとしよう。

そして俺はサイコロを投げた。

出た目は。

「…それでいいですよ。」

出た目はバラバラ、何の特徴もないが、ダンナはこれでイイらしい。

「…計画は入りません。」

「まあ良いでしょう、今回は諦めます。」

にこにこことご機嫌な理事長、話はこれで終わりか。

俺は、理事長室を後にした。

不知火袖は、一人でにっこりと笑い、サイコロを見つめていた。
そのサイコロは、普通のでは有るものの。

少し触れれば、スツとサイコロが静かに、バラバラになる。
他のサイコロも、まるで「斬り刻まれた」様に。
「だからこそ貴方を誘う意味があるのですよ。」

翌朝

太陽が眩しい、雲も存在しない青空。
その下でブルーな気分登校していた。

昨日不知火と飯食ったのだが諭吉四人消えた。

あいつ…年々食う量増えてね？

ますますブルーになる。

はあ…

そんな気分、目の前に善吉が居た。

…ボロクソやられてんぞ。

何があつたんだろうな。

「よう、善吉。登校中に事故つたか？」

「宮斗か、事故つてねえよ。」

俺に気づいて、こちらに苦笑いを向ける善吉。
顔が少し腫れてたりする。

「マジで何があつた？」

「あ…日向にやられたんだ。」

マジか、アイツ運動できないと思つてた。

「失礼すぎるだろ。」

「心読むなバカヤロー」

なんだコイツ、読心術できたのか？
半端ねえぜ！

「顔に出てんだよ」

「……………一応保険室いつとけよ。」

「無理矢理話を逸らした!？」

こんなバカみたいな話をしながら教室に向かう。

先ほどまで疲れた顔をしていた善吉が、今じゃ楽しそうに笑っている。

うん、よかった。

…日向、ねえ。

放課後

俺は今、道場付近を歩いている
つーか道場でかいな、中を見てみたいな。
だがまあ別に道場を見てみたい、と思っ
てきたわけではない。
目的は…と、来たようだ。

なんかボロボロの日向が歩いてきた。
たぶん善吉がやったんだろうな。

……よし、行くぞ。

「よう、日向君。」

ボロボロで痛みに歪んだ顔で、こちらを睨む日向。
よろよろとこつちに歩いてくる。

「…朝原…今機嫌がわりいんだよ、だから…」

隠し持っていた木刀を振りかざし、走ってきた。

「殴らせるおおおおおお!!!」

距離を詰め、頭めがけて振り降ろされた木刀。

だが遅い。

当たる直前、木刀は砕かれた。

「なっ!?!」

驚きの声を上げた日向。

木刀が砕けた理由は、俺が木刀めがけて剣を投げたからだ。

「な…おまえまさか…神刃カミギリ!?!」

……やっぱりこれを通ってるんだね?

だがいい。時間は稼いだ。

本当は一発ダチの為に殴りたかったが…コイツには、もっと凄い罰
が下る。なぜなら。

「日向ー後ろ後ろー。」

「はっ?」

「何をしているんだ。」

生徒会長が日向の後ろで、仁王立ちしていた。

日向、骨は拾っというてやるよ。

黒神は日向の襟首を掴み、引きずっていった。
本当に、お疲れさまでした！

次の日

何時も通り教室に向かったとき、善吉がある事を口にした。
なんでも、日向がツンデレになったとか。

…萌えねえな。

ガラガラ、と扉を開ける「待っていたぞ朝原同級生」閉めた
「善吉、俺の目は腐ったのかもしれない。俺の席に生徒会長が座っ
てた」

「俺も同じ物が見えた。お前の目は腐ってないぞ。」
ならばあれは一体どういう事だ？

「そういう事だぞ朝原同級生。」

「どついう事だよっ…うおおい！？何時の間に！」

「…マジで忍者かよ。」

いつの間にか俺の後ろに立つ黒神、本気でビビった俺。冷静に突っ
込む善吉

教室前で何やってんだろつな。

て言うか、俺に何か用なのかよ？

「朝原同級生、貴様は昨日、日向と居たな。」

と、昨日の話であったか。

「居ましたね、それが何か？」

「あの場所で粉々になっていた木刀は、お前が壊したのか？」

あー壊したね、うん

だけどそれがなんだよ、壊しちゃいけなかったか？

取りあえず答えとく、異常は抜きで

「まあ…ちよつと、蹴ったらバキツと。」

「ほう、日向同級生から聞いたが、何やら光った剣を出したらしいな？」

日向あああああああ！！？

貴様なんて事をおおおお！！善吉がスゲエ驚いてんぞおおお！！
教室に入って日向の眼鏡を割りたくなつたが、善吉の一言で動きは止まる。

「光ってる剣…まさか！？お前が神刃カミギリ！？」

指を指しながら俺に話しかける善吉。

少し震えていた、なるほど…怖がっているのか。

「…そうらしいな、こ「デビルカッケエ！」わ…い…？」

は？デビル何？

てか、怖がってない？

「マジかよ、俺普通に会話してたぜ、

まさか宮斗が神刃カミギリだったなんてな！」

少し興奮しながら話す善吉、…怖がってない？

すると、生徒会長が俺に

「朝原同級生、生徒会に入らないか？」
と勧誘してきた…正直イヤです。
だから折角の誘いを断ることにした。
後に大変なことになるとも知らずに。

あの後もしつこく俺を勧誘してくる生徒会長。
俺は、走ってそれから逃げ回っていた。

「まて朝原同級生、廊下は走るな！」
「お前もな！」

ああ、誰か助けてえー！

第四箱 「疲れた」

逃げていた、必死に必死に逃げていた。

どれほど逃げたのだろう、それも分からないくらいに、走り続けた。苦しい、息がしづらい、だが足は止められない。

ふと、後ろを見たが…やはり追いかけてくる。

ああ、授業が始まる。…いまグラウンドを走ってる俺は、もう遅刻は確実だろう。

「オラ待てよ！」

「誰が待つかこのクレイジーキッズがあ！」

「クレイジーは認めるがガキ扱いするんじゃないねえ！」

「ちょ！あぶなあ！」

小さきお子様、雲仙冥利…

俺は、風紀委員に追われていた。

回想

俺は何時も通り、学校に通っていた。

善吉と話しながら、な。

「はあー…またあいつが追いかけてくるのか。」

「…お疲れさん。」

善吉は同情するが…それなら変わってくれ。だが無理なのだろうな、うん。

ガックリと肩を落とす、今日も始まる鬼ごっこ。

「それにしても、善吉生徒会に入ったのかよ。」

「まあ…な、アイツのブレイキ役しなきゃな。」

「ほおー…そこから黒神恋愛フラグが立ち上がる。」

「それをすべて粉碎してやるよ。」

そんなこんなで教室につき、席に座る。

さあ、今日も普通な日になることを願う。

と思った時期が俺にもあった。

昼、俺は屋上で立っていた、沈みかけている太陽をジーっと見つめた。

黒神が今日、追いかけてこなかった。

別に寂しかった訳じゃないからな？ただ気になったただけだ。

何か依頼があったのかな？

まあどうでもいいや、今は日の光を浴びながらのんびりしよう

その考えで俺は仰向けになろうと倒れる。がしかし

ゴス、と鈍い音が響き、同時に後頭部が痛かった。

そして後ろで「イテエエエ！！」「アニキイイイ！？」などと叫び声が聞こえていた

あっ…おれぶつかったのか。

「お前…いきなり頭突きはねえだろ！？」

「いや、…わりいわりい。」

「謝って済む訳ねえだろが！アニキが鼻血出してんじゃねえか！」

被害者はデブとノツポ、何処にでも居そうな不良だそしてデブが起き上がり、俺に掴みかかろうとしていた、が

「デュウイヤアアアアア！！！」

「ガハッ！」

「アニキイイイ！？おまつまだアニキなんもしてねえだろ！」

デブを蹴り飛ばした…ついでにチビを睨んだら一瞬で逃げてった。かなり早かったな、11組か？

なににせよ、俺はまた空を見上げた、そして…

左に飛んだ

「ケケツ よく避けたな。」

周りを見渡し声の主を探す

それは近くに存在した。

肩に風紀の腕章を身につけている子供…雲仙冥利が立っていた。

風紀委員…余り詳しくないが、なにかしらの武装をして、肅正して
る野蛮な集団

中には手錠をメリケンサックにしてる奴もいれば、自転車振り回す
奴もいるらしい

…物品の正しい使い方も知らないバカの集団でもある

それでも、中にいる雲仙はかなりヤバい奴らしい。

…そんなやつにエンカウンとしてるが、別段悪いことはしてないは

ずだ。

「見てたぜ、お前が一方的に攻撃してたの。」
何を言っている、一方的になんて…確かに、別の人から見ればそう思われるな。

「いや、…あいつらが突っかかってきたりして…正当防衛的な…」
それっぽいことを言いながら、逃げ道を探す。
扉の近くに雲仙が立ってるし…逃げ道はない。
あの身長ならば、押し退ける事も出来るはず…自信はないがな。

「いや、正当防衛にしちゃ強すぎ。」
喋っている今がチャンス、後ろの柵を飛び越え、グラウンドに駆ける！そういう作戦だ。

実行開始！

後ろにある柵を越え、重力に従い落ちる、着地の衝撃を消すために
刀槍剣戟で、刀を壁に刺し、勢いを殺す！
ガリガリと削られる壁、一階付近になると飛び降り、着地する。
そのまま一気にダッシュ！

「ケケツ、異常を使うのか？」
と思つてた時期がありました。
あいつが振り向いた先に居た。

回想終了

「しっかし、飛び降りて逃げるとはなあ…俺でも考えねえよ。」
嘘だ

「まあいいか…そらよッ！」

何か飛んできた、そのまま俺の腹にぶつかった。

鈍痛…痛い…なんだ？何を投げたあいつは？

「立ってられるのか？普通なら倒れてんだがな…ほらよ、これを食らって立ってたらべた褒めしてやるよ！」

と次は五個…丸い何かが飛んでくる。

それを俺は避けない…奴の武器を調べるために。

顔、腹部、両足にあたりながら、痛みに耐え、俺は立っていた

「…おら、立ってるぞ、褒めてみるや。」

「おまえ…何もんだ？」

驚いているな、だがまだ驚くところじゃない。

俺は右腕を突き出し、唱える

「ブレイクスWORD刀槍剣戟：毘紗門・叢（びしゃもん、むら）」
唱えた瞬間、彼の周りに無数の剣が取り囲む。

毘紗門・叢とは、いつもの頑丈な剣ではなく、脆く壊れやすい。少しでも衝撃を加えれば爆ぜる

それに同調するかのように周りも壊れていくが…

その破片こそが凶器…脆くなつたが鋭さは変わらない。

触れば斬られる破片が、空から降り注がれる様になる。

まあ今回はそんな危なさはない。

取り囲んでる剣群を見て驚いてる雲仙をほったらかし、走って逃げる…
つーか放課後だし。

その途中、なんか狼に噛まれてる善吉が居たが、見て見ぬふりをした。

第四箱 「疲れた」(後書き)

次回予告

「お前そのかつこうなに？」「気づいた？一周回って基本バカだよ？」

「犬…ではないよね？」「宮斗、ゴー」

「見つけたぜ！」「そんなバカな…」

次回 第三箱 「参る！」

「不知火きつさまあああああああ！！」

第五箱 作り出すは刀、想像するは最強を（前書き）

お久しぶりです

タイトル変更しました。

そして注意、今回はかなりグダグダです。

第五箱 作り出すは刀、想像するは最強を

「……てな事があつてな。」

「へえー、早速風紀委員会に目をつけられるなんて、流石宮斗じゃん」

「シャレになんねーよ。」

教室にて、不知火と昨日のことを話していた。

雲仙に狙われたことを話すとスゲー上機嫌な。

コイツ…人の不幸を生き甲斐にしてんのか？

そつだ、雲仙の武器について聞いてみよう、コイツはかなりの情報屋みたいなものだし、知つてそつだ

「いやー、全然しらなーい。」

そつですか、今の言い方にちよつと腹がたつた俺でした。

そして丁度よく教室に来た善吉…またボロボロの状態で

あれか、狼に食われたからか？

「おー…昨日狼に食われたのか？」

「ああ…不知火に聞いたのか？」

「いや、食われてるとこみたから」

「助けるよ！」

怒られた、別に死ぬ訳じゃないしさ。

つーか、何で狼捕まえよう？

「いや…逃げ出したボルゾイって犬を捕まえてくれっていう。」

「冗談、あれは犬じゃないっしょ。ロシアンウルフバウンド」

その名前を聞いた善吉はガツクリと肩を落とす。

「今日もまた捕獲しにいかなきゃなんねえ」

「え？なに、捕まえてないの？ダッセー。」

「そんなに言うならおまえやってみるよ！」

と激怒する善吉、無理無理、狼だぜ？

麻酔銃があるなら話は別だけど

そんな事をいつてみたら善吉がにやけ始めた

「え？なに、もしかして怖いの？ダッセー」

「いよおおし分かった！やってやんよコラあ！捕まえてやんよ！」

「じゃあ、放課後な、逃げるなよ？」

「上等！」

ゼツテー捕まえてやる、待ってるよ！犬！（狼です）

放課後

そして放課後まで時間は飛ぶ。

昼はビクビクしながら過ごした、だって風紀委員に目をつけられてるし。

またあのガキが来るかもしれなかったし、こえー！

そんで今は身を屈めて、あの犬を観察してるところ。

間近で見るとメツチャ怖い、なんであんな安い挑発を受けちゃったんだらうと後悔する。

「善吉：バカにしてゴメン」
「…分かってくれればいいさ。」
「ププ、二人して怖がってダサーい。」
「…じゃあお前が行けや！」

不知火の発言に叫ぶ俺達、その声を聞いた犬はこっちに唸ってた。
やべー非常にやべー。

「宮斗ゴー」

「いや、あの状態で！？アイツめっちゃ敵意むき出しよ！？」
「いいから、レッツゴー」

俺を突き飛ばす不知火、おかげで隠れてたのに出てしまった
そして犬の標的は俺に変わる
そして襲いかかってきた！

「不知火きつさまあああああああ！！！！」
「みつ宮斗おおおおおお！！！！」
「アッハハハハ、サイコー！」

数分して、俺は善吉に助けてもらった。
マジで助かった、今度メシ奢ろう。

「え、ホントー」
「不知火、テメーはダメだ。」
くそ、噛まれたところがまだいてえ。

「そついや、生徒会長も来るんだろ？」
「ああ…遅いな、何やってんだめだかちゃん。」

頭を押さえて、ため息をはく。
そうとう疲れたんだろうな、早く来ないかな黒神。
まあ…もう来てるか。

「善吉、後ろで真似コトられてるぞ。」

善吉の後ろで同じポーズをする…犬の着ぐるみ。
…たぶん、コイツだろうな。
つと、善吉が気づいたようだ。

「誰だお前！」

「無論、私だ。」

バカみたいにデカイ犬の顔、その口を開いて顔を出す黒神。
やっぱりそれか。

「お前じゃなきゃよかったのに…」

善吉、俺もそう思う。

不知火に至っては汗ダラダラ流してる。
久しぶりに見た表情だ、俺に怒られて正座してる時の。

「少し良いですか？…その格好は…」

不知火が質問する、少しおどおどしながら。

「これは、ターゲットに私が仲間だと思ってもらう作戦だ、動物と
触れ合うにはこちらから歩み寄ってやる事が大切だからな！」

と自信満々に言う黒神、その顔はまるで「どうよ？」「とどや顔して
る様だった。

…どっかのバラエティ番組ですか？

不知火は啞然とし、善吉はタメ息を吐いた。

「そうっすか、俺は帰るから。」

「ここまで来てかえんのかよ。」

「見たい番組が始まる、じゃあな、頑張れよ。」

「うむ、また明日、朝原同級生。」

そそくさと帰る、今日はやな予感がする。

早めに帰らなきゃ…番組が始まる！

ダッシュで校門を抜けようとしたとき。

「よお、見つけたぜ！」

校門の前で立っていた…あのクソガキ、風紀委員の腕章を付けた雲仙冥利が。

だが、しかしだ。今回は狙われることは無いはずだ。だって、何もしてないしな。

「なんの様ですか？」

「いやあ、今日な？鬼瀬ちゃんから報告あつてな？…お前が菓子食ってる所を見た奴が居るってよ？」

…しまった、つい不知火に分けて貰って食ってたな。まさかチクられるとは…誰が。

「まあ、知つちまったからには…仕事はしなきゃな！」
と袖から何か飛び出し俺に向かう。

それを…あえて受け、飛んでくる一つをキャッチ！

こいつは…カラーボール？いや、スーパーボールか？

こんなのを武器にしているとやっば…風紀委員はいろんな意味で凄
い。

「お前：俺の武器を調べるためにわざと避けなかったのか。」

まあ…一個掴んで後は当たりに行っただけだからな。

所々痛い、だが：スーパーボールなら大丈夫だ。

コイツは屋内じゃないと力を発揮しない。

運が良かったか。

「どうしても帰さない気…ですか？」

「いや？少しお前を痛ぶってから反省させて帰すつもりだぜ。」

なるほどな、…痛い思いはしたくないから、戦うか？

「分かりました…痛い思いはしたくないんで、抵抗させてもらいます。」

思考、イメージする。

俺の能力は、イメージすることで力を発揮する。

強靱な刀、長く鋭い槍全てを叩き斬る剣

それら全てを合わせ、斬り刻む戟を想像

そして最後にイメージする。

常に最強の自分を。

「最初に言っておく、死んでも責任は取らないぞ？」

「……………想像完了、後は映し出すだけ。」

「……………刀槍剣戟、毘沙門・叢」

ブレイズソード

ひび・まも・まじび

俺の後ろで作り出された剣達、それらは目の敵へ飛ばす投擲用。

左手には小刀、右手には大刀。

さあ、見せ場だ。

「……朝原宮斗、神刃^{カミギリ}…参る！……」

始まる、この場は数分後…鮮血に染まるだろう。

第五箱 作り出すは刀、想像するは最強を（後書き）

次回予告

「今のは…？」 「なんだよ!？」

「… たった一発でそれかよ…」 「消えるガキ!」

「くっそ… ちよつと不味いな？」 「… 俺は…」

めだかボックス 全てを斬り刻む者

第六箱 阿修羅の刃は全てを焼き斬る

「……………じゃあ、こいつも食らってみろ。……………」

第六箱 阿修羅の刃は全てを焼き斬る

「おらおらおらあー!!」

「おおおおおおおー!!」

絶え間無く降り注がれるスーパーボールを弾き、剣を投げ続ける真つ二つに割れる玉は地面に転がる
これで何回叩き落としたのか、分からない。

「っはあ…チツ、そろそろやられる!!」

雲仙の袖から大量に飛び出す弾丸を左右に動きながら避ける
スーパーボールは跳ねるのに優れてる。
屋内：狭い通路なら強力な武器となるが今いる此処は屋外
校門前で広い空間だ、故に全包围攻撃ではなく、只投げるだけとなる。

「当たらねっての!!」

手に持つ剣で叩き斬る…だが数個地面を跳ねて来るのを止めれなかった。

体中打撲で痛むが、それは雲仙も同じだろう。
服は所々斬られ、白の服に血が染まる
奴も限界…なら、このまま押し切る!

「ブレイズソード 刀槍劍戟、ソウガ 槍牙……」

手に作るは槍、鋭い槍だ。

エネルギーの刃が延びて、細長い槍となる。

「…避けるなよ？」

「!？」

一瞬で間合いを詰め、突きを放つ。

が、バックステップで避けられる…だがしかし追撃

払い、これを体を捻り無理に避けようとするが避けきれず掠る

薙ぎ、これは避けれないと悟ったか腕でガードする。

服を破き、肉を裂くが切断はされなかったか。

ラスト突き上げ、これは先ほどの薙ぎを防いだ勢いで後ろに飛ぶ雲仙だがそれでいい。

この為の攻撃順…これら全てが技なんだ。

左手に弓を作り出し、槍を使い構える。

ギリギリと弓が鳴り、腕に力を込める

狙いを定め…放つ！

「ゴットフォース
神槍弓牙!!」

槍は一直線に雲仙の腹に飛ぶ…しかし、横に飛んで避けられる。

ここまでで何分だ？10分も満たないのに俺には一時間ぐらい経った気がする

白い制服に赤が染み渡る

…雲仙が俺を睨む

「あつぶねえ…おい、殺す気か？」

「いや、避けるって信じてたぜ！」

「む？」

「いつ今のは…!？」

「爆発だな、しかも門の辺り。」

「音だけで場所分かるのかよ!？」

「とにかく行くぞ！」

「ちょ、待てよめだかちゃん！」

煙が校庭に漂う。

さながらテロの起きたような、所々クレーターに血溜まりができて
いる。

その場所に一人、座り込んでいた。

雲仙冥利、泣く子も黙る風紀委員長だ。

服は裂け、切り傷だらけの血塗れの彼は、まだ煙を睨んでいた。

「あんなんでやられるはずねえ…まだ…」

一点を睨む中、見つけた…煙の中に立っている人影。

影は一歩ずつ近づいていた。

雲仙は重い腰を上げて、立ち上がると袖からまたボールをだす
先ほどばらまいた玉は火薬…これはふつうのスーパーボールだ。

「…おら、こいよ、風紀委員の看板背負ってんだよ…逃げねえぞ！」

影は答えない。

「それにな、テメエの技は見切ったんだよ。もうあたらねえ!!」

影は消えた(・・・)

「っ!?!」

一瞬だった、気づくのに一瞬、0・1速く気づけたら、結果は変わっていたかもしれない。

後ろに居た影に、気づけたら。

————ジャアコイツヲクラツテミロー——

瞬間、彼の全身は燃えるように熱くなり、意識を手放した

ちっと熱くなりすぎたか…反省しないと。

校門が砕かれ、校庭はクレーターと地面が抉れた後…は。

そして、血塗れの雲仙…

こんな時にあのネジ野郎が居たら無かった事にできんのかな。

まあ良いか…俺は雲仙を見ながら答えた。

「神刃の力は…この程度じゃない、その気になれば校舎も壊せる。」
まあ、聞こえてないだろうが…

じゃあな、雲仙。

その後、意識不明の雲仙は目を醒まし、傷は消えていた
辺りのクレーターが消えていた。

雲仙は、困惑した…先ほどの一体なんだったのか。
もしや夢か？と想いながらも歩みを進めた。

彼の近くにネジが転がっていた

黒神たちはその後に来たが何もないことに困惑、夜九時まで校内を
調査していた

『まったく、彼の後始末は大変だよ。』

第六箱 阿修羅の刃は全てを焼き斬る（後書き）

次回予告

「ようこそー柔道部へー」「おまえ柔道できんのか？」

「あの構えは…!？」「お久しぶりです！」

「不知火、そろそろ…」「あの方は俺の誇りさ」

次回 「あ、久しぶり！」

「……漢を見せろ、馬鹿者。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8833u/>

めだかボックス 全てを斬り刻む者

2011年11月16日11時12分発行